

パネル

宗教学、社会学、民俗学の誕生

——ヨーロッパと日本の共振——

代表者・司会 安藤礼二

コメンテータ 関 一敏

民族学と民俗学——折口信夫『古代研究』の起源——

安藤 礼二

柳田國男と折口信夫の民俗学は日本だけで可能になったものではない。その学の誕生には、よりダイナミックな、ヨーロッパと日本における人文諸科学の交流と混雑があったと思われる。その事実を明らかにしてくれるのが、大正末期から昭和初期にかけて、柳田が主体的に関わった雑誌『民族』である。「民俗」ではなく「民族」という命名は、柳田の強い希望によるという。柳田の中で、民族学 (ethnology) と民俗学 (folklore) の融合が図られていたのだ。柳田は創刊号から、後に『神樹篇』や『妹の力』の中核となる多くの論考と報告を発表していった。祝祭の場には聖なる樹木が立てられ、神が降臨し、聖なる神子が生まれる。あるいは、祝祭の中で人は神となる。柳田の「人神」論の核心である。

柳田から大きな刺激を受け、折口もまた『民族』に、『古代研究』(全三巻)の中核となる諸論考を発表していった。しかし、それぞれの学の確立は、それぞれの学の差異を際立たせる

ことにもなった。柳田は、折口が書き上げた長大な論考、『古代研究』国文学篇の巻頭を飾ることになる「常世及び「まれびと」」を『民族』に掲載することを拒否する。柳田のこの決定が遠因となり、『民族』は瓦解する。わずか二一号をもって、『民族』は終刊を余儀なくされる。柳田の学の中心は、放浪する宗教者たちと荒ぶる「御霊」から、定住する農民たちと穏やかな「祖霊」へと移っていった。柳田と折口の学のもつ同一性と差異性が明白になってくるなか、両者をなんとか一つに総合しようとしたのが、『民族』の編集を実質的に担っていた岡正雄である。折口の「マレビト」論を傍らに置きながら、岡は「異人その他」を書き上げる。岡は、柳田と折口の両者の学が形成されるにあたって、ともに大きな影響を与えた南島(八重山群島)の仮面祭祀を「秘密結社」の問題として捉え直す。

「異人その他」は、岡がウィーン大学に提出した学位論文『日本の文化層』の原型となった(結局、この学位論文はドイツ語でも日本語でも刊行されなかった)。岡の助手をつとめたのがアレクサンダー・スラヴィクである。スラヴィクは、南島に現在でも生きている若者たちの仮面祭祀と古代のゲルマンに痕跡を残す狂暴戦士たちの仮面祭祀の驚くべき類似性について論考を書き(『日本とゲルマンの祭祀秘密結社』一九三六年)、日本文化の古層に存在すると想定された「聖なる来訪者」信仰の詳細をまとめた(「まれびと」考一九五九年)。岡はスラヴィクの「秘密結社」論は、ミルチャ・エリアーデの『永遠回帰の神話』(一九四九年)の一つの重要な源泉となった。岡はスラヴィクは、「秘密結社」の仮面祭祀の核心に「聖なる来訪者」

信仰を位置づけ、聖なる者の来訪によって、経済の根源、「交換」の原理が明らかにされると説いた。そこでは人間の側から見れば「供犠」が、神の側から見れば「贈与」が行われ、聖なる来訪者によって時間と空間が刷新される。

『民族』で一貫してデュルケーム派の宗教社会学が紹介されていることを考えてみれば、岡Ⅱスラヴィクの見解は、柳田の「人神」論と折口の「マレビト」論だけでなく、そこにマルセル・モースの贈与論を重ね合わせるものでもあった(モース自身、岡の「秘密結社」論に興味を示したという)。柳田と折口は、神々の世界と人間の世界を一つにつなぐ媒介者を見出したのだ。柳田の祖霊論に満足できなかった折口は、媒介者としてのマレビトを突きつめていく。媒介者は、祝祭の只中で、供犠にして贈与でもある力(「マナ」)の解放とともに顕現する。さらに折口は、柳田とは別の神を求める。おそらく折口の導きの糸となったのは、『民族』に集い、ともにウィーン学派のヴィルヘルム・シュミットを師と仰ぐ岡や宇野円空によって批判的に紹介されたラッファエーレ・ペッタッツォーニの「最高存在」である。ヨーロッパの比較宗教学と日本の民俗学は間違いなく共振していたのである。

モース宗教社会学の生成

溝口 大助

マルセル・モースの思想展開は、その「叔父」デュルケームの宗教社会学の展開と不即不離の関係にあった。二人の書簡からも、初期モース宗教論の「生成」においてデュルケームが重要な

位置づけにあることは明らかである(Durkheim 1998)。この事実は一面で真実である。だがしばしばモース宗教社会学の「生成」と発展において見過ごされてきた事実がある。それは、インド文献学に基づいて発展した初期モースの宗教論で決定的な役割を果たし、中期および後期モースの宗教論の展開にも少なからぬ影響を与え続けた「もうひとりの叔父 *deuxième oncle*」(Fournier 1994: 93) シルヴァン・レヴィの存在とその影響力である。

そこで本発表の目的は、①「供犠の本質と機能に関する試論」(以下、「供犠論」)から②「贈与についての試論——古代社会における交換の形態と理由」(以下、「贈与論」)までの理論展開における繋がりを手短かに紹介し、③インド学者仏教学者シルヴァン・レヴィの影響に着目することにより、モース宗教社会学のもうひとつの「生成」を証拠立てることにある。具体的には、①「供犠論」の成立過程を瞥見し、②「贈与論」の議論との連続性と差異を指摘し、③「供犠論」と「贈与論」の両方で採用されたシルヴァン・レヴィに代表されるインド学仏教学のアイデアの変遷を見ていく。とくに③のシルヴァン・レヴィのインド学仏教学における当時の位置づけを指摘することにより、モース思想におけるアジア的共振も探ってみよう。

①と②では「供犠論」と「贈与論」を瞥見する。「供犠論」の草案を書き上げていたモースは、初期デュルケーム学派宗教社会学セクションを一身に担うべく、ユベール、エルツをはじめとした同セクションの研究者と協力関係を築き、壮大なデュルケーム理論を基礎付けようとした。それは確かである。その証拠